

# 三宅剛一差出・田辺元宛書簡

中川明博

## 論文要旨

「三宅剛一差出・田辺元宛書簡」は、昭和期を代表する哲学者三宅剛一（1895～1982年）が、母校京都大学の恩師田辺元（1885～1962年）に宛てた書簡を、ご遺族の了解の上翻刻し、必要な校訂を加えたものである。書簡は1924年から田辺の死の3年前の1959年までの間に投函されたもので、それは三宅の東北帝国大学助教授時代から、ドイツ留学、戦後の京都大学教授時代を経て、昭和30年代の学習院大学教授時代に及ぶ。

これらの書簡は、東京教育大学教授、学習院大学教授を歴任した哲学者下村寅太郎博士（1902～1995年）が生前保管していたものである。下村の膨大な遺品に含まれていた多数の田辺元宛書簡類のうち、三宅剛一差出の全15通が本書簡である。

本書簡を通じて、私たちは日本を代表する二人の哲学者の間に育まれた知的交流の一端を伺い知ることができるだけでなく、時に率直に師の意見を求め、忌憚なく師の思想を批判する文面から、三宅剛一における哲学的態度のあり方を見て取ることができるだろう。

キーワード【三宅剛一、田辺元、哲学的態度、みずから考える、共に考える】

## I 本書簡について

ここに掲載する「三宅剛一差出・田辺元宛書簡」は、昭和期を代表する哲学者三宅剛一（1895～1982年）が、母校京都大学での師西田幾多郎の後継者田辺元（1885～1962年）に宛てた手紙15通を翻刻し、必要な校訂を加えたものである。書簡は1924（大正13）年から田辺の死の3年前の1959（昭和34）年までの間に投函されたもので、それは大正期、三宅の東北帝国大学助教授時代から、ドイツ留学、戦後の京都大学教授就任を経て、昭和30年代の学習院大学教授時代に及ぶ。これらの書簡に共通する特徴は、田辺に対して尊敬の念を忘れることなく、ときには研究上の不安感を吐露し、自分の考えに対して批評を求め、あるいは田辺の論文・著作に対して批判的に自分の意見を語ることで、みずから考えることをさらに鍛え上げようとする三宅の厳正なる学的意志が表現されていることである。これらの書簡を通じて、私たちは二人の哲学者の間に育まれた知的交流の一端を伺い知ることができるだろう。

本来これらの書簡は、東京文理科大学（後に東京教育大学）教授、学習院大学教授を歴任した哲学者・下村寅太郎博士（1902～1995年）が生前保管していたものである。下村の膨大な遺品に含まれていた田辺元宛の書簡類のうち、三宅剛一差出の全15通が本書簡である。なぜ三宅が投函した田辺元宛の書簡を下村が保管していたのか。下村が逝去した現在となつては、もはやその確たる経緯を示すことはできない。しかし下村の高弟竹田篤司・元明治大学教授の『物語「京都学派」』（中公叢書）の「あとがき」に以下の記述がある（〔〕は中川による補足、以下同）。

「平成七年（1995）、下村寅太郎が九二歳で死去した後、下村の遺品の中に、このテーマ〔いわゆる「京都学派」〕に関わる膨大な資料が発見された。未発表の西田、田辺らの手紙、数千通におよぶ田辺や下村あての受信書簡。下村の未定稿・未発表原稿、日記、手記、ノート等々である」（306頁、傍点中川）。

ここに記されていることは、何らかの事情によって田辺宛の書簡が下村によって保管・保存されて

いたという事実である。この事実在先立つ事情を勘案する材料はきわめて乏しい。だが、西田幾多郎、田辺元を筆頭に、京都大学哲学科出身の多くの人々と永きに渡る交流を重ね、また『田邊元全集』の編者であった下村が、三宅差出を含む田辺元宛の複数の書簡の保管を田辺の死後関係者から託されたと考えても、けっして突飛な推定ではないだろう。事実、下村は「〔田辺〕先生の没後、私の手許に保管されていた遺品を収めた二つのリング箱」の存在に言及しており、その中には、たとえば波多野精一差出田辺宛書簡なども含まれていた旨記している（「田辺先生の追憶—記録的なこと二、三—」、『下村寅太郎著作集』第13巻、430頁）。

下村の逝去後、恩師の書斎・書庫の整理を担当されたのが前記の竹田篤司・元明治大学教授と島雄元・元長岡工業高等専門学校教授である。両氏は下村の遺品の学問的価値を考慮し、その整理、複写、判読、分類、読解という難儀な作業に着手され、その成果の一部は『下村寅太郎著作集』等に反映されている。一方、下村が保管していた書簡類のうち三宅差出下村宛の書簡は、すでに酒井潔・学習院大学教授によって「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡（上）（下）」として、学習院大学人文科学研究所『人文』第1号（2003年）および第7号（2008年）に公開されている。このような経緯を考慮してみると、今回の「三宅剛一差出・田辺元宛書簡」も、広い意味では下村寅太郎博士の遺品の判読・解読作業の一部と位置づけることができるし、狭義では三宅剛一研究の一環をなすものである。

もともと本書簡は、遺品の整理に当たっておられた島雄元・元長岡工業高等専門学校教授から酒井潔教授に、その翻刻・校訂が依頼されていたものである。今回、過去に三宅剛一の遺稿の翻刻・校訂経験をもつ筆者が、この任にあたることとなった。

## II 三宅剛一と田辺元——その接点から

解題として、三宅と田辺の接点・共通点を取り出し、書簡のそのつどの時期の両者の状況、背景を解説するかたちで三宅と田辺の関係をたどってみたい。両者の接点・共通点は、おおまかに言って、(1) 京都帝国大学哲学科、(2) 東北帝国大学「科学概論」の担当者、(3) ドイツ留学経験者、(4) 京都大学教授、(5) 哲学者として、に整理できると思われる。順に考察してみよう。

### (1) 京都帝国大学哲学科

三宅と田辺の最初の接点は京都帝国大学文化大学哲学科を舞台としている。三宅が、西田幾多郎に師事するために哲学科に入学した大正5年（1916）当時の教授陣は、西田幾多郎、朝永三十郎、深田康算、波多野精一という錚々たる布陣であり、明治39年（1906）に京都帝国大学哲学科が開設されて10年が経過していた。その哲学科に田辺が助教授として着任したのが大正8年（1919）。大正5年（1916）に入学し、大正8年（1919）に哲学科を卒業した三宅とはほぼ入れ違いの形になるとはいえ、三宅は卒業後も哲学科副手として西田幾多郎の講義や演習に出席したり、京都府立第一中学校の英語講師として引き続き京都に居住していたのだから、その間当然田辺との密接な交流があったことだろう。西田と共に母校京大哲学科の双壁をなす教官田辺を尊敬を込めて「先生」と呼ぶ三宅は、田辺に対して生涯敬意をもち続けたのはもちろんのこと、等しく哲学を志した学問上のよき相談相手でもあった。とくに最初期の書簡を読むと、若き三宅にとって田辺は学問上の先達であるだけでなく、時には愚痴をも許容してくれるはずの、頼りがいのある存在と映っていたことがわかる。田辺は大正13年（1924）ドイツ留学から帰国し、昭和2年（1927）京都帝国大学助教授から教授に昇進。昭和3年（1928）には西田が定年退官して、名実ともに京都帝国大学哲学科の牽引役となっていた。他方三

宅は大正10年(1921)旧制新潟高校教授を経て、大正13年(1924)から東北帝国大学で「科学概論」を講じた。以下で触れるが、仙台での三宅はたいへん辛い時間をすごしていた。

本書簡のうち、いちばん早い時期の書簡[1]は仙台へ移ってまもない大正13年(1924)に、書簡[2]が昭和5年(1930)に差出されている。いずれも葉書で、自分の身辺および心境の報告が中心である。「なまけて何も出来ないで私もくれて行きさうです」(書簡[1])や、「考へやうとすれば解らないことばかりで自分ながらなさけない気がします」(書簡[2])といった心情を吐露することで、なかなか進展しない研究への焦り、徒労感、孤立感などを、京都の、10歳年上の田辺宛に率直に書き綴っている。京都から遠く離れた仙台的地で研究の進展もままならないと嘆く三宅の声は、古巣京大哲学科への郷愁というよりも、「みずから考える」ことを可能にするような「共に考える他者」への渴望であろう。本書簡における「共に考える他者」こそが田辺元に他ならない。

## (2) 東北帝国大学「科学概論」の担当者

東北帝大の「科学概論」担当者は、初代が田辺元(在任1913～19年)、次いで小山鞆絵(1919～21年)、高橋里美(1921～24年)、三宅が四代目となる(1924～42年理学部助教授、1942年からは法文学部哲学哲学史第四講座を兼任、1946年以降1954年までは法文学部哲学哲学史第一講座教授)。「科学概論」のポストは助教授のみで、教授への昇進の見込みはなく、また「科学概論」は自由選択科目であったため、「ただものずきな学生が一人か二人位、それも話が通じているのかかるのか」分からないような状態であった(昭和20年9月30日付、三宅剛一差出下村寅太郎宛書簡、『人文』第1号、158頁)。温暖な岡山育ちの三宅にとって北国仙台は気候的にも厳しい土地であったばかりでなく、当初東北帝国大学には文学部はもとより哲学科も存在せず、哲学について語り合う身近な相手も皆無であった。そして現在とは異なり、仙台は京都、東京から列車でも相当時間かかる遠隔地だった。師西田の「みずから考えること(Selbst denken)」を自身の格率としていた三宅だが、「共に考える」者のいない東北帝国大学は過酷な環境だった。

「科学概論」が東北帝大創設と同時に開設されたのは、理学部の学生に、数学や自然科学が知識体系全体に占める位置や他の文化領域との関係についての認識を与えるという目的による(竹田篤司『物語「京都学派」』52頁)。その重責を田辺以来の担当者たちが担ってきた。三代目の担当者高橋里美は、「科学概論」が自由科目であったので、学部内の雑事に煩わされずに勉強ができた、その境遇を肯定的に回想している(同、52頁)。しかし現実には、田辺が教鞭をとっていた時期でさえ、次のようなありさまだった。「〔東北帝国大学の〕環境は哲学に対する積極的な関心をもたない理学部であり、専攻の哲学上の同僚も交友も皆無の孤独な生活であった。そのうえ聴講者も極少で〔2名のときもあった〕張合いのない雰囲気であり、〔…田辺先生は〕『東京に帰りた』と哀情を訴えている」(下村寅太郎「田辺先生の追憶一記録的なこと二、三一」、『下村寅太郎著作集』第13巻、431頁)。三宅が担当していた時期も厳しい環境に大きな変化はない。それどころか、戦況が悪化するにつれ、大学での環境もいっそう苦しくなっていく。三宅は、研究こそ続けているとはいえ、聴講者がいなくなって最後まで講義ができない年が続いているにもかかわらず、理学部から俸給を得ていることを深刻に悩み、「理学部といふ公の機関を私のために利用してゐるやうなやり方であるといふ気がして来ました」(昭和20年9月30日付、三宅剛一差出下村寅太郎宛書簡、『人文』第1号、158頁)と、その苦しい胸の内を吐露するにまで至っている。

こうした苦悩がいつ終るかもわからない仙台時代の三宅にとって、前任者田辺はその境遇を理解し

てくれるであろう先達であり、同時に、科学や数理の哲学について学問的な意見を交わすことのできる大切な存在であったにちがいない（書簡 [1] ~ [3]、[7]）。三宅が「先生の『数理哲学研究』を自分の研究の台本にする様な気持ちで勉強した」（書簡 [9]）と記しているように、「科学概論」の先任者田辺の著作も、仙台で孤独な日々を送る三宅にとっては学問的にも精神的にも貴重なものだっただろう。田辺は数理哲学、科学哲学の研究からその経歴をスタートし、その後政治、宗教、歌論などさまざまな分野に関心を拡げて行ったが、数理哲学への関心は晩年まで止むことはなかった（田辺は『科学概論』『最近の自然科学』『数理哲学研究』をはじめとして、多数の数理哲学関係の論文を発表した）。三宅も「数の対象性」「実数の領域と連続」（いずれも昭和4年）といった数理哲学、科学の論理から思索を始め、それはやがて大著『学の形成と自然的世界』（昭和15年）に結実する。数理哲学に関する両者のアプローチの仕方には違いがあるとはいえ、共通の学問領域への関心の共有と真摯な学問的な交わりが、本書簡から伺い知ることができるだろう（書簡 [3] [7]）。

### (3) ドイツ留学経験者

書簡 [4] から [6] までの三通は留学先のドイツから投函された葉書である。三宅は昭和5年（1930）から昭和7年（1932）までの約2年間、文部省留学生としてフライブルクに滞在する。フッサール邸を訪れて話を聞いたこと、気鋭の哲学者ハイデッガーとの出会い、大学で聴講している講義の報告など、充実した留学生活の様子を田辺宛に書き綴っている。

大正期から昭和初期にかけては、数多くの学者がドイツ、フランス等に留学を果たした。京大関係者だけでも、山内得立、九鬼周造、田辺元、三木清、朝永三十郎、天野貞祐、上田寿蔵、務台理作、和辻哲郎、三宅剛一など目白押しである。田辺は大正11年（1922）年から同13年（1924）まで、ベルリン、フライブルク、パリに滞在した。フライブルクでは例にもれず、フッサール、ハイデッガー、オスカー・ベッカーらと交わった。しかしこの2年間の留学期間中、田辺は大学と下宿の間を往復するだけで、楽しみといえば休日にカテドラルを眺めることだけだったという（竹田篤司、125頁）。禁欲的とも言える田辺に対して、書簡での三宅はドイツ生活を十分堪能しているように見える。旺盛に研究を推進しながら、休日にはハイデルベルクを訪ねたり（書簡 [4]）、ミュンヘン、ニュルンベルク、チュービンゲンを観光したり（書簡 [5]）、旅の途中で学会に参加したりしている（書簡 [6]）。そうした近況を綴りながらも、西田と田辺の現象学解釈をハイデッガーに話したとか、ハイデッガーとの面談で田辺のことがいつも話に出ているとか、先輩留学生田辺への言及も忘れてはいない。しかしそれは単に三宅の社交儀礼ではあるまい。当時の最新の哲学であった現象学は、それに対していかなる態度を取ったのであれ、西田、田辺、三宅それぞれが、貪欲に吸収しようと努めていた重要な思考基盤の一つであった。そうであるならば、自分の師である西田、田辺の解釈が、現象学派の嫡子ハイデッガーの目にどのように映ったのかは、三宅自身の思想形成にとって決してないがしろにできる問題ではなかったはずだからである。西田も田辺も、そして三宅も、単に西洋の哲学を輸入・紹介することで満足するのではなく、「みずから考えること」を哲学の核心とみなしていた。三宅のドイツ留学もフッサールやハイデッガーの説を咀嚼して日本へ紹介することが目的ではなく、みずから考えるための基盤固めという意味を持っていただろう。とするならば、三宅にとって田辺は単なるドイツ留学の先達という世俗的な存在ではなく、留学によって錬磨された田辺の哲学そのものが、三宅自身の思索を学問的に厳密に形成し、みずから考えていくための一つの「試金石」（書簡 [7]）という意味を持っていたのではないだろうか。

#### (4) 京都大学教授

昭和20年(1945)4月、田辺は京都帝国大学教授を定年退官し、7月に群馬県長野原町北軽井沢の大学村に居を移す。三宅は昭和22年6月1日付下村寅太郎宛の書簡で次のような感想を書き記している。「田辺さんの近況についての御報告何か心を打つものがあります。ずっと前に千ヶ瀧の山内さんの別荘で夏を過したとき裏軽井沢のあたりを通ったときの情景を思ひ出します。鎌倉での寸心先生〔西田幾多郎〕の悠々たる生活を考へ合せると小乗と大乘とでもいった感じがないでもありません」(『人文』第7号、180～181頁)。西田は「私にはこわい人であったが、向かい合っても気が楽になる人(三宅剛一「思い出すまま」、『西田幾多郎一同時代の記録』岩波書店、昭和46年所収)であったのに対し、田辺は修行僧のごとく刻苦勉強して自己の理想的境地に至らんとする人物と三宅には映っていたようである。同じ昭和22年6月1日付の下村宛書簡で三宅は、「最近の田辺さんの書くものは読みづらくてあまり読んでみませんが何か内から生れ出て来るといった感がなく、僕には親しみにくい気がします学問に打ちこんだ態度はえらいと思ひます」(『人文』第7号、181頁)と批評している。「最近の田辺さんの書くもの」が何であるか言及されていないが、昭和21年には「日本民主主義の確立」「政治哲学の急務」「社会党と共産党との間」「種の論理の実践的構造」そして『懺悔道としての哲学』等が、翌22年には「宗教の倫理性」「知識階級現在の任務」「プラトニズムの自己超越と福音信仰」など、政治論文、宗教哲学的著作が数多く発表されている。三宅にとってこの時期の田辺の著作が「読みづらく」「親しみにくい」のは、政治・宗教哲学を前面に主題化した田辺と、哲学は論証と体系を不可欠とし、あくまでも経験的現実を志向する三宅との哲学観の違いに由来すると考えられる。ジャーナリズムをはじめとして世俗的なものを一切拒絶して生きた三宅であったが、仏教などの東洋思想を批判なしにただ有難がる態度にも終始否定的だった。

三宅にとって田辺は、東北帝国大学「科学概論」の先輩教師であり、フッサール、ハイデッガーの元で学んだドイツ留学の先達であった。そして今度はこれに京都大学哲学科の先輩教授という項目が付け加わる。三宅は昭和29年(1954)京都大学文学部哲学科哲学史第一講座教授に就任する。この講座の教授職は、西田幾多郎、田辺元、高山岩男、山内得立と引き継がれてきた輝かしいポストである。書簡[8]はこの教授職を引き受けたことを知らせる手紙である。田辺が京大の教官を26年間の長きに渡って務めたのに対し、三宅の在職は定年までの4年間である。しかしその間三宅は、新制京都大学哲学科を軌道に乗せることに尽力しつつ、「哲学概論」「人間存在論」の講義、ヒューム、カント、ディルタイ等の演習を通じて多くの後進を育てたばかりでなく、科学基礎論学会等の学会においても指導的な役割を担い、戦後の日本の哲学界に大きな貢献を果たした(書簡[8]～[12])。

#### (5) 哲学者として

京大教授就任以後の書簡([9]～[15])は、田辺からの著書謹呈に対する礼状や、「京都大学文学部五十年史」への寄稿依頼や、京大定年後、学習院大学教授に転任することの通知などが中心である。これらの戦後の書簡に特徴的なことは、田辺が戦後数多くの論文・著作を刊行したにもかかわらず、三宅が言及しているのは田辺の数理哲学関係の論文・著作と歴史に関する論述に限定されているということである。田辺自身がこの領域を主題とする論文・著作しか三宅に贈呈しなかったのかもしれないし、三宅差出田辺宛の書簡がまだ他にも存在した(存在する)可能性も否定できない。しかし三宅は田辺の政治哲学、宗教哲学関係の著作を閲覧して、それについて自分の意見を田辺に開陳することも容易にできたはずなのに、本書簡を見る限りその形跡はない。やはり、三宅は数理哲学の領域に格

別の関心をもっていたと考えてよいだろう。上に引用したように、三宅は昭和 22 年の下村宛書簡で、田辺の政治・宗教哲学の著作は「読みづらく」「親しみにくい」ともらしていた。だが三宅のこの違和感は、一個人の偶然的な傾向にとどまるのではなく、哲学に対する三宅の基本的な態度に由来するように思われる。

三宅の哲学的態度について下村が次のように評している。「〔三宅博士〕我々の代表的な体系的な思想家、西田、田邊、高橋の諸家に創始者として深く敬意を表しながらその哲学思想に追随せず、次のように批判するのであります。/これらの哲学はいずれもひとしく西洋の哲学のように『存在の哲学』でなく『こころ』の哲学であって、一途に究極的なものをめざし、それについての考え方の十分な基礎づけなしに、一挙に究極的なものに飛躍し、思想を凝縮せしめる。〔…〕博士はこのような性格をもつ体系家に追随することを拒み、自らの道として『現実の人間の存在の哲学』を企図したのであります」（下村寅太郎「故三宅剛一会員追悼の辞」、『下村寅太郎著作集』第 13 巻、460 頁）。下村は、哲学者三宅のこうした態度を「きわめて強靱な批判的精神」（同 459 頁）と表現している。それは単に三宅の鋭い批評眼という個人的な思想的特徴にとどまるものではなく、日本の哲学界の現実的状况に対する反省を動機としているという。近代哲学の伝統を欠いた日本の哲学に哲学的伝統の地盤を築き上げるためには、西洋の哲学を実際の歴史的連関において厳正に把握することが必要であり、そうすることによってはじめて、成立の地盤と伝統を異にする西洋哲学との真の出会いが成立する。そうすることが自己の思想の錬磨となり、自己に甘えた節制のない主観性に陥ることから守られる。こうした鍛錬と反省こそが必要なのであって、三宅は西洋哲学に対しても、日本の伝統に対してもあくまでも批判的立場に立って、それによっていかなる批判にも耐え得る厳正な哲学を樹立しようとしていると下村は述べている。本書簡からも読み取ることができる三宅の批判的性格は、生涯にわたって深い交流を持ち続けた下村の三宅評をたしかに裏書きしていると言えるだろう。大正期から昭和 30 年代に至る本書簡において、先達である田辺に対して敬意を表しながら、しかし卑下することも、情に流されることもなく、冷静に事柄の根拠を問いただす批判的・学問的態度そのものが表明されている。たとえば書簡 [15] では、「ヘーゲルでは歴史はテロスをもつ発展と考へられて居り私はそれには同意しかねる——或はそれはむしろ信仰であって、ヘーゲルのやうにキリスト教的信と哲学との一致を確信しない限り断言できないことのやうに思ひます」と、きっぱり反論している。

三宅のこのような「批判的精神」は歴史的考察方法と結びついている。再び下村の言葉を借りれば、田辺の『科学概論』と『数理哲学研究』が「もっぱら認識論的性格」であったのに対し、三宅の『学の形成と自然的世界』は「哲学史的考察を通じてなされた科学の歴史的・内面的・批判的論究」であるという（『下村寅太郎著作集』第 13 巻、456 頁）。『学の形成と自然的世界』は、西洋の科学は単なる特殊科学ではなく、学的理性と世界の関係という哲学の核心をなす問題と通底していることを歴史に即して示した大著であるが、しかし単なる哲学史ではなく、西洋の科学・哲学の根本にある知識の本質的なあり方を「その始元的本質性」（同、457 頁）において観ることを可能にさせる仕方で論じている。すなわちそれは、歴史的考察を媒介にした省察である。もちろんそこで取り扱われている各哲学についても批判的に考察されていることは言うまでもない。

前半生における主著『学の形成と自然的世界』公刊以後、三宅の思考はやがて社会、歴史、実存といった領域に拡大していく。昭和 29 年（1954）に京大教授となった三宅は、昭和 33 年（1958）に定年退官し、同年学習院大学教授に就任。昭和 37 年（1962）田辺が逝去する。学習院大学教授を昭和 40 年（1965）に定年退職した後、三宅は精力的に研究に没頭し、『人間存在論』（1966 年）、『道徳の哲学』

(1969年)、『芸術論の試み』(1974年)、『時間論』(1976年)、『経験的現実の哲学』(1980年)と、みずから思索した成果を次々に刊行していった。

田辺は西田にはじまる日本の哲学的伝統の批判的後継者であった。三宅もこの京大哲学科の伝統に連なる一人であるが、西田とも田辺とも一線を画している。「三宅さんは西田幾多郎先生のもとで学び、先生に対して深い敬意をいただいている人で、その意味では西田哲学や京都学派に属するはずの人ですが、三宅さんほど西田哲学的色彩や傾向の少ない門下は稀であります。〔…〕三宅さんはだれにも追従しない人で〔…〕」(下村寅太郎「三宅剛一—ある講演会での紹介の辞—」、『下村寅太郎著作集』第13巻、157頁)と下村は述べている。とはいえ「だれにも追従しない」三宅は、他者を排しおのれの内に閉じこもるような孤立者ではない。下村が評するように、三宅は「決して偏狭固陋の人でなく、豊かな教養に富み風雅を解する人」(下村寅太郎「故三宅剛一会員追悼の辞」、『下村寅太郎著作集』第13巻、456頁)であり、鋭い批判眼をもった人間通、独特なユーモアの持ち主であった。また、三宅のご子息、三宅正樹・明治大学名誉教授も、「父は直ちにいわゆる宗教哲学へ走ろうとはしなかった。むしろ徹底的に科学と、科学が把握した形での経験的現実とを内在的に理解することに努めた。〔…〕明証性のない論理の飛躍を父は絶対に許さなかった」(三宅正樹「あとがき—三宅剛一の人と学問—」)と記しておられる。

三宅にとって哲学することと生きることに違いはなかつただろう。古今東西の書物を読破し、厳密に批判的に思索し、他者の思索を批評し、そしてみずから考えることをさらに鍛え上げる。だが、こうした三宅の厳格な研究態度は他者を排除するものではない。三宅においては「みずから考えること」と「他者と共に考えること」は矛盾しない。現に、田辺への敬意を怠ることなく、しかし時にその学問に対して忌憚なく批判を開陳する本書簡は、そうした三宅の姿を私たちに伝えてくれる貴重な資料である。

#### 付記

これまで三宅剛一博士の遺稿等について掲載をお許し下さり、今回も本書簡の本誌への掲載をご許可くださったご遺族の三宅正樹・明治大学名誉教授に厚く御礼を申し上げます。

また、本書簡を含む下村寅太郎博士の遺稿や書簡等の整理・保存に従事された島雄元・元長岡工業高等専門学校教授、故竹田篤司・元明治大学教授に深く御礼を申し上げます。

最後に、本書簡の翻刻・校訂を委ねて下さり、これまでと同様、三宅剛一研究に際して多大なご理解とご助力をいただいた酒井潔・学習院大学教授の変わらぬご厚情に、あらためて深謝申し上げます。

#### 参考資料一覧

- 伊藤益『愛と死の哲学—田辺元—』北樹出版、2005年  
 熊野純彦編著『日本哲学小史』中公新書、2009年  
 下村寅太郎『下村寅太郎著作集』第13巻「エッセ・ピオグラフィック」みずす書房、1999年  
 下村寅太郎編『西田幾多郎—同時代の記録—』岩波書店、1971年  
 酒井潔「西田幾多郎と三宅剛一」(『学習院大学史料館紀要』第12号、2003年、1～67頁)  
 酒井潔・中川明博編『三宅剛一著 ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』学習院大学研究叢書、2006年  
 酒井潔「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡(上)」(学習院大学人文科学研究所『人文』第1号、2003年)  
 酒井潔・加瀬宣子「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡(下)」(学習院大学人文科学研究所『人文』第7号、2008年)  
 竹田篤司『物語「京都学派」』中央公論新社、2001年  
 田辺元『田辺元全集』全15巻、筑摩書房、1963-64年(田辺の年譜は本全集第15巻に依拠した)  
 中岡成文「種の論理—田辺元—」(常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998年)  
 中岡成文「絶対否定は何を差異化するか」(藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂、2001年)  
 中川明博編『三宅剛一著 論理学講義(新潟高校講義)・科学概論』学習院大学研究叢書、2008年  
 細谷昌志『田辺哲学と京都学派—認識と生—』昭和堂、2008年

三宅剛一「自覚ということ」(下村寅太郎編『西田幾多郎一同時代の記録一』岩波書店、1971年)  
三宅剛一「思い出すまま」(下村寅太郎編『西田幾多郎一同時代の記録一』岩波書店、1971年)  
三宅正樹「あとがき—三宅剛一の人と学問—」(三宅剛一『経験的現実の哲学』弘文堂、1980年)

#### 凡例

資料としての統一を保つために、酒井潔「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡(上)」(学習院大学人文科学研究所『人文』第1号、2003年)での表記に準じた。

#### 配列・書簡番号・日付・宛名等について：

- 1 全書簡を原書簡(コピー)に基づいて翻刻した。
- 1 書簡は年月日順に配列し、順に書簡番号[1]～[15]を付した。日本人の書簡の例にもれず、書簡日付には年号が記されていない。その場合は消印に依拠したが、消印も不明の場合には、書簡の内容や記載事項から推定を試みた。なお、推定の根拠については一々注記することはしなかった。
- 1 各書簡とも、日付を付した後、封筒の裏表や葉書に記された宛名の住所・氏名、差出人の住所・署名をその通りに記した。

#### 書簡本文について：

- 1 書簡本文において、漢字、送り仮名等は、原則的にすべて原文に忠実に従った。原文において正字体の漢字が使われている場合には正字体により、また略字体の漢字が使われている場合には当用漢字によりそれぞれ表記した。原文では、同一書簡内においても、また同一書簡内の相前後する箇所でも、正字体と略字体の漢字が混在していることがあるが、それらの場合でもいずれの漢字も逐一原文に従い、上記の原則により表記した。
- 1 句読点が必要と認められる箇所、原書簡にそれがない場合には、一字分を空けることにより読解の便を図った。
- 1 明らかな誤字については訂正して記した。正誤の判定が不可能であったり、意味不明な箇所はママというルビをふった。
- 1 明らかな脱字は、〔 〕に入れたうえで文中に補った。
- 1 判読不可能だった箇所は、その字数分の□で示した。
- 1 原書簡における段落や行間隔にはそのまま従った。
- 1 その他、中川による補足や注記は、すべて〔 〕を付して表わした。
- 1 原書簡は縦書きである。指示語(左記、右記など)はそのままとした。
- 1 各書簡の哲学的小および哲学史的な意味や背景を明らかにするうえで必要と思われる最小限の注を付した。

## 三宅剛一差出・田辺元宛書簡

[1] 大正13年(1924)10月28日付〔葉書・縦書〕

京都市上京区富小路丸太町下ル 田邊元様

その後は御無沙汰しました お褒りございませんか 土曜日に出て鳴子で一晩とまり翌日は平泉に行って中尊寺で半日をすごして来ました 鳴子の辺は丁度紅葉が美しい時でした。中尊寺の山内から北上川の上流を眺めると北の方には頂の白くなった山も見えてゐました。なまけて何も出来ないで私もくれて行きさうです。お大切に。廿八日

仙台市同心町通四十五 千田方<sup>1)</sup>

三宅剛一

[2] 昭和3年(1928)12月29日付〔葉書・縦書〕

京都市上京区吉田上大路二 田辺元様

仙臺市中島町六七 三宅剛一

その後すっかり御無沙汰いたしました この頃御健康は如何でございますか 近頃は京都の方の様子もあまり聞かないのでどんな様子なのかと時々ひとりで思つてゐます 私もこの数年思索の神から見はなされた様にしてやつて来ましたので内心の憂うつをますばかりでしたが この頃少し身の安静を得ましたので日頃ぼんやり考へてゐることを少しははっきりさせてみたいと思つて居りますが 考へやうとすれば解らないことばかりで自分ながらなさけない気がします

はじめは数の無限という様な問題を考へやうとしたのですが そのうち数といふもの、概念がわからなくなってしまい いまはそんな事柄を考へて居ります この冬帰国<sup>2)</sup>したら色々お伺ひしたいと思つてゐたのですが 都合で今度は帰らぬことになりました そのうち少し考がはっきりして来たら何かとお教を願ひたいと それを一つの楽しみにして居ります こちらは雪の中で年がくれます い、お年越しを祈上げます

二十九日

[3] 昭和4年(1929)5月27日付〔封書・縦書便箋4枚〕

京都市吉田中大路町一七 田辺元様

仙台市中島町六七 三宅剛一

その後は御無沙汰致して居ります 御褒りなくみられることを何よりと存じます

先日は色々とお面倒な願をしました 拙稿<sup>3)</sup>に對し御懇切な御手紙を下さいまして非常に嬉しく存じました 充分考へが熟してから筆をとつたといふのでないものですから 色々な点で考へ足りない所のあることは自分でも気がついてゐますので過分の御言葉で恐縮に存じますが それでもとす

1) 旧制新潟高校教授であった三宅は、大正13年(1924)5月に東北帝国大学理学部助教授命の辞命を受け、その後仙台に移り住んだ。仙台での三宅の最初の住所は、これまでの研究では「花壇川前町一五番地」と考えられていた(酒井潔「西田幾多郎と三宅剛一—伝記的研究の試み—」学習院大学史料館紀要、第12号、2003年)。しかしこの葉書の日付から判断すると、こちらの「仙台市同心町通四十五 千田方」が先である。

2) 三宅の郷里岡山への帰郷のこと。三宅は、仙台から帰郷する折には京都に立ち寄ることが多かった。

3) 三宅が昭和4年5月『哲学研究』第158号に発表した「数の対象性」論文(『経験的現実の哲学』弘文堂、昭和55年に所収)のことか。

ると學問に対する自分の能力を疑いながらやっています 私としてはあゝした激励の御言葉は何よりうれしく思われます

御注意下さいました点はなほよく考へてみたいと思っております あの時場面といふものを主に種々の次位の平均化の地盤といふ方面から考へましたため 場面と概念とか集合とかの関係が外面的になってしまったのかも思われます 限定的なもの、根據といふ様な意味から御教示のやうな点を考へてみなければならぬと思っております

個々の集合と概念との対応を考へましたのは 集合の成立という方面よりも成立した集合の一義的な限定、一定の要素だけを選択的に含むといふことから考へたのですが それはすでにその選擇の基礎になる絶対無限でしかも最後まで個別化が悉く具備した全体を予想するわけで そこにrealistischに考へる考方の根本の難点があるやうに思われます その点に自由な構成作用を第一におく考方の出て来る所以があるのかと考へられます たゞ私には kolligierender Akt を先にして考へるとしても その Akt の進行の一義性を規定し、自由な無限の進行を一定の仕方限定して個々の定まった集合を生ぜしめる原理が何であるかといふ問題に逢着し そこに私には解らぬ点が出て来ます 一般者の自己限定といふ考へには その限定が全体の法則的な Gliederung によって規定せられるとする思想が含まれてゐるかと思ひますが さう考へれば個々の kolligierender Akt はその全体の体制に基いて内から一義的に定まるといへるのかも知れませんが さういふ点ではまだよく考へて居りませんので思ひがちがひしてゐる所があるでせう とに角集合の限定に概念を対応させるだけではほんとうの問題解決にはならぬといふことは御教示によってよく解って参りました 実数と連続の問題もいつか考へてみたいと思っておりますが<sup>4)</sup> 連続を一種の場面に個々の実数を特殊の概念に対応させて考へられはしないかといふほんやりした予想を前からもつてゐたのですが 対象化された連続をそのまゝ、場面に当てることは許されないわけで そこに六かしい点が出て来るのでせう さういふ方面では Intuitionist の考へにも面白いところがある様に思われます いま学校で空間のことをやつてゐるのですが準備が足りなくてへんなものになりさうです でも空間の問題はやはり一番深い問題を含んでゐるやうに思はれ いつかよく考へてみたいと思っております

御手紙に御禮を申上げるつもりで色々なことを書いてしまひました どうか今後も何かと御指導をお願いいたします

五月二十七日

三宅剛一

田辺先生

[4] 昭和5年(1930)6月6日付[葉書・縦書]

Herrn Prof. H. Tanabe Kyoto Japan  
京都市吉田中大路町十七ノ二号 田辺元様  
Abs. G.Miyake  
b / Frau Weis  
Bismarkstr. 4  
Freiburg i / Br. Deutschland

4) 三宅はこの書簡と同年の昭和4年の10月と12月に、論文「実数の領域と連続」(『哲学研究』第163、165号)を發表している。

その後お変わりもありませんか 私はスイスを経て先月廿一日に当地につきました<sup>5)</sup> 詳しい手紙を書くつもりで今日まで延べておりましたがそれはまた後にします

フッセルはもう講義してゐないので自宅に訪ねたら色々とお話してくれ これから生涯の自分の研究の収穫が始まるのだなどといつて居ました ハイデッガーはいかにも忙しさうなので学校で一寸話したら後で訪ねることにして居ります ベッカア<sup>6)</sup>にたのんでフッセルの *Formale und transzendente Logik* を読むことにしました 大学では外にエビングハウス<sup>7)</sup> (カント、ライネフェル) カウフマン<sup>8)</sup> (歴史哲学) をきいています 幸ひ健康も悪くなく土地の居心地もよいので喜んで居ります プフィングステン<sup>9)</sup> の休みになつたので二三日ハイデル方面に旅行に参ります では又、どうかお大事に  
六日

三〔宅剛一〕

[5] 昭和5年(1930)8月11日付〔葉書・縦書〕

Herrn Prof. H. Tanabe Kyoto Japan

京都市吉田中大路町十七ノ二号 田辺元様

Abs. G.Miyake

bei Frau Dürre

Bayernstr. 8

Freiburg i.Br. Deutschland

八月三日にフライブルクを<sup>マ</sup>立って ミュンヘン、ニュルンベルクを廻つてテュウビンゲンに参りました ドイツルネサンスの画をみたりその頃の建物をみたりして<sup>マ</sup>当地のドイツのことを考へさ、れました テュウビンゲンは周囲の眺めはよいと思ひますが 町そのものは田舎町らしいうすぎたなきがたゞよつてゐる様で 当年の反抗児の気分もや、解るよ様に思はれます。

このあいだハイデッガーに行つて西田さんの考や現象学に対する批評や、先生のそれに対するお考へを一寸話してみましたら興味をもつてゐるらしく思へましたが その時は時間がなくて今度の折を約してわかれしました。哲研に出た御論文<sup>10)</sup> をよんで色々教へられました。そのうち西田さんのもの

5) 三宅がフライブルクに到着した日付が1930年5月21日であつたこと、スイス経由でのフライブルク入りであつたことがこの葉書の文面からはじめて判明した。

6) Oskar Becker (1889～1964)：ドイツの哲学者。最初ライプツィヒで数学を学んだが、後にフライブルクのフッセルのもとで哲学を専攻し、ハイデッガーからも影響も受けた。1931年ボン大学教授。著作は『数学的存在』(1927年)他。

7) Julius Ebbinghaus (1885～1981)：心理学者ヘルマン・エビングハウスの息子。1909年ハイデルベルク大学のヴィンデルバントのもとで博士号を取得し、1921年にフッセルのもとで大学教授資格を得た。その後フライブルク大学で私講師を務め、ハイデッガーとも親交を結んだ。1926年にフライブルク大学の助教授となり、1930年にはロストック大学の教授に就任した。戦後はマールブルク大学の学長も務めた。カント哲学を中心に、法論、国家論、社会哲学を専門とした。主な著作には次のものがある。*Kants Lehre vom ewigen Frieden und die Kriegsschuldfrage* (1929), *Zu Deutschlands Schicksalswende* (1946 / 1947), *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen* (1957), *Die Strafen für Tötung eines Menschen und Prinzipien einer Rechtsphilosophie der Freiheit* (1968)

8) Fritz Kaufmann (1891～1958)：ゲッティンゲン大学、フライブルク大学でフッセルに学び、ハイデッガーからも影響を受けた。フライブルク大学の私講師を経て、1936年よりベルリンのユダヤ教大学で教えた。ナチス体制を逃れてアメリカに移住し、いくつかの大学で哲学を講じた。1958年ヨーロッパに戻るもまもなく死去。主著として *Geschichtsphilosophie der Gegenwart* (1931), *Kunst und Religion* (1936) がある。

9) Pfingsten：精霊降誕祭 (Ostern 後の第7日曜日)

10) 田辺元「西田先生の教を仰ぐ」(『哲学研究』170号、1930年5月。『田邊元全集』第4巻所収)。

も少しくわしくよみ まとめて考へてもみ、ハイデッガーにも話してやろうと思つてゐます<sup>11)</sup> ハイデッガーは今度の学期にはヘーゲルの精神現象学を講義します<sup>12)</sup> 先生のことはいつも話に出<sup>13)</sup>、序があったらよろしく云つてくれとのことでした。では又。 八月十一日 テュービンゲンにて  
今月から右記に転居しました

三宅剛一

[6] 昭和6年(1931)6月1日付[葉書・縦書]

Herrn Prof. H. Tanabe Kioto Japan

京都市吉田中大路町一七 田辺元様

先日は朝永先生の祝賀論文集<sup>14)</sup>を御送り下さいまして誠にありがとうございました 先生の御論文<sup>15)</sup>の外にも読みたいものが澤山あるので暇々に読んでゆきたいと思つてゐます。別刷の方はハイデッガーにとゞけます。若い友人でドイツ語のうまい人になので あれをドイツ譯にしてもらひ一緒にして出すつもりです プフイングステンの休みに大小島君<sup>16)</sup>と一緒に中部ドイツ地方に出かけました。ハレでカント協会の大会に出て ニコライ・ハルトマンの „Zum Problem der Realitätsgegebenheit“<sup>17)</sup>といふ講演と 諸家のそれに対する Diskussion をききました。少し詳しいお便りでもしたく思ひますが 旅行中のあわたゞしさにそれも出来ませんのでとりあへず御禮のみ。 ニュルンベルクにて 三宅剛一

御機嫌よく御暮しで御座りますか 三宅様と御一緒にハレのカント協会に出席致しました ハルトマンの講演は興味深く聞きました 何れフライブルクに帰つて詳しく申し上げたいと存じます 遙かに御健康を祈上ます

六月一日

大小島眞二

11) 三宅の「思い出すまま」(下村寅太郎編『西田幾多郎—同時代の記録—』岩波書店、昭和46年、123頁)に次の報告がある。「湯浅誠之助君に助けてもらつて、「一般者の自己限定」についてのサンマリーをドイツ語でタイプして、ハイデッガーにみせたことがあった。それはひどく不完全なもので、先生〔=西田幾多郎〕の哲学の真意は出ていなかったが、「ヘーゲルに似てるね」というハイデッガーの感想もあつけないものであつた」。

12) Heidegger Gesamtausgabe, Bd. 32: *Hegels Phänomenologie des Geistes* (Wintersemester 1930/31), 3 Aufl. 1997, 『ハイデッガー全集』第32巻、第二部門 講義 ヘーゲル『精神現象学』、創文社、1987年所収。

13) 大正11年(1922)、京都帝国大学文学部助教授だつた37歳の田辺は、文部省在外研究員としてヨーロッパに留学した。はじめはベルリン大学で、後にフライブルク大学のフッサールのもとで学び、ハイデッガーの1923年夏学期講義『存在論—事実性の解釈学』を聴講したり、オスカー・ベッカーらと親交を深めた。大正13年(1924)に帰国。後の昭和32年(1957)、フライブルク大学創立500年祭にあたり、同大学から名誉博士号を授与された(推薦者はハイデッガーとオイゲン・フィンク)。

14) 朝永三十郎(1871~1951年)の定年退職記念論集『朝永博士還暦記念哲学論文集』天野貞祐編、岩波書店、昭和6年のこと。朝永は東京帝国大学を卒業後、ドイツ留学を経て、1910年京都帝国大学の哲学・哲学史第四講座(西洋哲学史)の教授となつた。西洋近世哲学史を研究し、昭和6年(1931)定年退職。

15) 田辺元「総合と超越」(上掲『朝永博士還暦記念哲学論文集』への寄稿論文。『田辺元全集』第4巻所収)。

16) 大小島眞二(1899~1979):大阪生れの哲学者。北海道帝国大学に進むが、一年後に東京帝国大学文学部哲学に入学。大学院卒業後、昭和2年に大阪の東商業高校教諭、同年8月には山口師範学校講師を勤めたが、昭和4年、京都帝国大学大学院に進む。翌5年からドイツに留学し、同じく留学中であつた三宅らと共にフッサール、ハイデッガーらの教えを受けた。帰国後は関西大学に職を得て同大学の教授として停年を迎えた。専門はキェルケゴール。クリスチャンであつた。

17) Nicolai Hartmann(1882-1950):ドイツの哲学者。ラトビアのリガ生れ。マールブルク大学でコーヘン、ナトルプの指導を受け、大学教授資格を取得。1925年ケルン大学教授、1931年ベルリン大学教授、大戦後はゲッティンゲン大学教授を務める。三宅らが聴いたハルトマンの講演は *Zum Problem der Realitätsgegebenheit*, Philosophische Vorträge, Pan Verlag, Berlin 1931. として出版された。

[7] 昭和9年(1934)12月31日付[封書・250字詰縦書原稿用紙16枚]

京都市左京区吉田中大路町十七 田邊元様

仙台市中島丁四〇 三宅剛一

拝復 この様な手紙を書くことをおゆるし下さい 先日は御懇切な御手紙をいただき誠に有がたうございました 粗雑な自分の考に対し 先生のやうな方から直接に親切な御教示をいたゞけることは非常な幸福です 毎度の先生のお手紙はともすれば鈍りがちな私の研学心に対し、この上ない刺激であり試金石であります 御厚意に甘えこれからも時々手紙を差上げることをお許し下さる様願ひます

判断以前の可能な意味の領域といふやうなことを申し上げました事に対し先生の御指摘下さったところは、私の気づかないでゐた根本的事態で実により御注意でした。意味の複合とか推理とかといふことをいふとき、意味はすでに Satzform を含んでゐる或は Satz 的に gegliedert であり、さういふものとして 判断を媒介にした抽象であるといふ先生の御説の通りです。私はあれを書いたときあまり深い考もなく、否定の力の発現しない前といふやうなことをいったのですが、非常に足りない考方でした。今考へてみますと論理的な見方と心理的な見方とをごっちゃにしてゐたので、心理的に従来から普通に表象結合とか Annahme (両者は多少異つてゐるでせうが) とかを、判断的決定に先立つもの、やうに説いてゐるやうな見方を知らず知らず頭においてゐたものでせう。現象学的にいへばむしろ判断の Neutralisierung として達する領域といつてよいでせう。判断的否定が中和せられてゐるところには勿論肯定もあるわけがなく、中和によって達する領域とすれば直接なる schlichte Position といふやうなものでもないわけで、これも先生の仰せの通りです。ともすれば陥りやすい Schicht 間の直線的な進行、或は一様の積み重ねのやうな考方に対し 先生の御注意は私にとって非常に有益でした。

ライブニッツ、フッセル、ラッセルなどの考方が logical atomism だといふお説は正当です。もともとと言語的表出を通して論理的なものを考へることに於て、また論理の意味を kombinatorisch に考へることに於て atomism であるわけです。しかし私はロジスティックをそのまゝ、自分のものとして受け容れる考へはありませぬ。「自由」なる Kombination なるものはいかなる地盤で成り立つかを考へねばならぬと思ひます。atomism の原型としてのギリシアのデモクリトスに於てすでに非有、空間といふものが考へられて居ります。そこからプラトンの弁証法の質料への聯絡も考へられないではありません。さういふ空としての地盤なしに意味の結合といふことはないでせう。先生は意味の可能界は判断の事実界から抽象されたものといはれますが、抽象とは何であり、それはどうして可能であるか。抽象は一般に貧弱化の如く見られてゐますが、一面さうであるかも知れませんが、他面それは解放であり、より広き(或はより自由なる)領域に結びつくことではないでせうか。分析といふこともたゞ分離しただけでは何物も成り立たない、分たれたるものが何かの地盤の上に保たれねばならぬ。その地盤は何か。それは矛盾律から自由であり、しかも矛盾的結合の意味をも意味として支へるものであるから、判断に対して單なる消去的抽象でなくもっと積極的なものであり、反省を支へるものとしての直観といつてよくはないでせうか(絶対否定といふこともその意味から理解出来ぬことはありません)。先生の直観的事実界<sup>18)</sup>といはれるのは十分に理解出来ないところがありますが、弁証法論理の分析論理に対する疑問といふのが 分析論理を保存し、可能にするといふ意味でしたら私の

18) この「先生の直観的事実界」に田辺の手によると推測される傍線が引かれている。また、この「先生の直観的事実界」から「私の考へ」とまで、上部欄外に横線が引かれている。

考へと<sup>19)</sup>よほど近いものではないかと思ひます。とに角抽象面といふやうなことはたゞ立体的なものを平面化するといふだけでなく、解放であり、特殊的限定そのものに於て顕現し得なかつた一般性の意味の発現であるといはねばなりません。可能の領域がまづ独立にあって、その制限によって現実が成り立つといふやうな考方は先生のいはれる通りあまりに素朴的で、可能なる意味の領域は判断を媒介とし、而も判断的現実の制限から自由であるものとしてより豊富な領域とみるべきであります。分析は二律背反に導くといふが、一方からいふと分析の場面は二律背反を「みえしめる」もので、さもなければそれはみえて来ないともいへないでせうか<sup>20)</sup>。

前の手紙で推理の可能<sup>21)</sup>といふことをいひましたが、普通の場合では推理（形式論理的）の基となる Implication の関係に於いて、それが成り立つか成り立たぬかといふ alternative の一方をとるわけで、判断的ですが、さういふものは中和的な意味の領域に於て直ちに成り立つとは云へないでせう。判断から解放せられた意味の領域を考へるとすれば、やはり推理的決定からも解放せられた「可能なる Implication」の関係を考へるべきでせう。△

△ K. Menger<sup>22)</sup> は数学の種々な制限は種々の Konstruktivitätsforderungen に対応するもので無矛盾性の要求は最広義の Konstruktivitätsforderung であるが、数学そのものは一定の Konstruktivitätsforderung に固着する必要はない、数学はたゞ Aussagentransformation をやるだけだといひ、その立場を „implikationistisch” と称してゐますが (K. Menger, *Der Intuitionismus*, Blätter für deutsche Philosophie, 1930) さういふ風に Erkenntnis と引離された Operation が “praxis” となつてしまへば数学は一つの Technik にすぎないもので、Grundlagenfrage も何もないわけだ。しかしこれは存外現代の数学の実状に當つてゐるかも知れませぬ。

可能なる意味といふとき可能とはいかなる制限であり、不可能なる意味とは何であるかといふ問題があります。矛盾せる意味 (Absurd) はまだ絶無不可能な意味ではないとして、さらに全く理解し得ぬ意味、意味をなさぬものといふものが考へられます。さういふ無意味にも全く意味性の圏外にあるものと (意味の絶対無)、理解し得ぬ意味 (フッセルの Unsinn, sinnlos) とが区別し得るが、後者は相対的には不可能でも、意味性をこえたものでなく、理解性を規定してゐる原理の制限内にないといふほどのものといへるでせう。(こゝで理解といふのは論理的の理解で、例へば象徴主義文学などの意味ではなく)。さういふ風に考へて行きますと、意味が解るとか解らぬとか、有意味、無意味といふ如きことを規定してゐる原理は無中心的ではなく、Verstehbarkeit といふことのうちにひそむ人間的なるもの<sup>23)</sup>——この人間的が何 [で] あるかは問題ですが——に係はつてゐるのではないかといふことが考へられて来ます。人間的といふ代りに経験的といつてもよいでせう。この問題はもっと精しく体系的に考へてみたら面白いものではないでせうか。プラグマティズムの如く significant といふだけでなく、「無用」な意味をも含めて考へねばならぬことは勿論です。我々は全く聯絡なきものは理解出来ぬのですが、その聯絡とは何か、そこに経験の Welt といふ如きものが考へられるやう

19) この「私の考へ」との箇所に、田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

20) 「可能なる意味の領域は」から、この「みへて来ないともいへないでせうか」までの欄外上部に、田辺の手によると推測される線が引かれ、○印が付されている。

21) この「推理の可能」の箇所に、田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

22) Karl Menger (カール・メンガー、1902-1985) : ウィーン生れの数学者。アムステルダム大学、ウィーン大学等の教授を務める。父は経済学者 Carl Menger。

23) この「いふことのうちにひそむ人間的なるもの」に、田辺の手によると推測される傍線が引かれ、上部欄外に○印が付されている。

に思ひます。さういふ点では所謂純粹意味論とか純粹論理学とかは非哲学的 *spezialistisch* な抽象的見地に立つもので、もっと根本的に哲学的に見直さなければならぬかと思はれます。数学的記号論やロジスティクの問題、数学と先験的論理学の関係の問題等も根本的な *revision* を要するでせう。

十九世紀数学の哲学からの疎外<sup>24)</sup>についての御説は全く正当で 私によきヒントを与へて下さったことを感謝致します。数学者が十九世紀の数学を批判的数学とよんで(高木博士、数学史談<sup>25)</sup>)ゐるのは 数学が十九世紀の *spezialistisch* な傾向のうち自力的に自己の *Begründung* をやろうとしたのを批判的といへばさうでせう。私は最近に「仕事場的反省、仕事場的基礎づけ<sup>26)</sup>」といふやうなことを考へてゐます。それは数論化的集合論的 *Axiomatik* がその最も代表的なものですが、それはまだ哲学的に達せないことはいふまでもありません。單純に純粹数学と応用数学を対立させるやうなことも十九世紀的なコンベンショナルなものではないでせうか。先生の仰る通り解析と数論代数との関係は従来の仕事場的反省によつては解決がついてゐないことは確かです。そこに存する弁証法的なるもの、及び連続の弁証法的な考方については 私の考がもう少しはっきりしてから御高教を仰ぎたいと思ひますので今日はふれないこと、致します

「社会存在の論理」<sup>27)</sup>は第二回まで読みました。これは先生のお書きになったもの、中でも特にすぐれたものであると思ひました。全体の御論旨については第三回の完結をまった上で更によく考へてみたいと思つて居ります。今日はたゞ一二の感想を述べさせていただくこと、します。

「我汝彼<sup>28)</sup>」の論理に対する御批評は深い同感をもつて先生の誠実な批判的反省を力強く思ひました。それが具体的な社会存在に対する問題を解くことの代りに消すものであるといふ御批評は急所をついたものと思はれます

ベルグソン<sup>29)</sup>哲学に於ける二元性の関係について先生の述べられてゐるところも、従来日本のベルグソン紹介が一面の主観的であつたのに対し、先生の御理解の確かさを証するものとして敬服致しました *Les deux sources*<sup>30)</sup>は私はまだ読んで居りませんが、*Essai*<sup>31)</sup>や『物質と記憶』で持続と空間、記憶と *perception pure* といふやうな対立は、いづれも理想型であるといふ御説は私も全く賛成です。*Essai*では純粹持続を「内的生(ヴキイ・アンテル)」に、同質的空間の意識を言葉を通して「社会的生(ヴキイ・ソシアル)」に結びつけて説いてあつたと思ひますが、純内的でも純社会的でもない現実の生に対しては これは單に兩極にすぎないことは先生の仰る通りです(原初社会に於ける論理についてはフライブルク滞在中ベッカーが講義の中 *primitive Logik*<sup>32)</sup>としてやつてゐましたが、いま筆記が見当らず、記憶もはっきりしません。レヴィ・ブリュールが引合ひに出されてゐました。彼の *primitives Dasein* の説も久しいものですがどう考へて行くものですか)。

24) この「数学の哲学からの疎外」に、田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

25) 高木貞治『近世数学史談』(『晩近高等数学講座』第2巻、共立社書店、1933年所収。岩波文庫、1995年)。

26) この「仕事場的反省、仕事場的基礎づけ」に田辺の手によると推測される傍線が引かれ、上部欄外に○印が付されている。

27) この時期田辺は「社会存在の論理」(上)(中)(下)を連続して発表した(『田邊元全集』第6巻)。(上)が昭和9年京都帝国大学『哲学研究』224号に、(中)は同年発行の225号に、(下)は翌昭和10年の226号に掲載された。「社会存在の論理」は、「種の論理と世界図式」(1935年)、「論理の社会存在論的構造」(1936年)とともに、「種の論理」を展開したもの(これら三論文はいずれも『田邊元全集』第6巻所収)。

28) この「我汝彼」に田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

29) この「ベルグソン」に田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

30) *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932.『道徳と宗教の二源泉』

31) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.『意識に直接与えられたものについての試論』

32) この「primitive Logik」と直前の「ベッカー」の箇所、田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

先生が現象学と論理との相互媒介といって居られるものは実に重大なる点で それについては更によく考へてみたいと思ふのですが、「通論」<sup>33)</sup>で疑問となったこと、結びつけて それについての思ひつきを書いてみます。

ヘーゲルのまゝでない弁証法に於て発展といふ概念がいかなる意味をもち得るか、又歴史といふものがいかなるものとして成り立つかよく解らないで居りました。唯物史観では革命の後に来るものがより進んだ社会であるといふことがどういふ意味で云はれるか不明です。通論の中では絶対弁証法は道徳的行為の弁証法とされてゐますが、そこで「歴史は…実践的現在の永遠なる立場の自覚に於ける内容の発展を時間的に構成したのものとして成立する」(221)とあります。内容の発展といふのは具体的に<sup>34)</sup> どういふことなのでせうか。別のところに「論理学は常に精神現象学との聯関に於てのみ成立し、後者の現実に制約せられる歴史的発展と共に、それに相即的に、前者も常に歴史的発展の動的なる絶対的統一をなすのでなければならぬ」(190～91)とありますが、発展の歴史性ともいふべきもの、弁証法的発展が歴史と結びつく所以は、現象学的現実といはれてゐるものの媒介によると考へてよいでせうか。そこで現象学的現実の歴史性的構造はどういふものと考へるべきでせう<sup>35)</sup>。私はそういふことを考へる上に哲学的自覚の歴史<sup>36)</sup>といふことから考へてみました。哲学的自覚の歴史なるものがあるとなれば、それは道徳的行為そのもの、自覚の歴史となるわけでせう。この歴史が発展といひ得るのはいかなる意味であるか。後のものが前のものよりより具体的であるといはれるのはどうであるか。哲学的自覚に歴史がなり立ち得るのは 自覚のいかなる構造乃至契機によるかといふことは精しく考へてみなければならぬわけですが いまの考としましては<sup>37)</sup>、絶対的自覚はその絶対性を失ふことなしに、しかも「経験」といふ性質をもつことにあるのではないかと思ひます。ヘーゲルは精神現象学を「意識の経験の学」と別名してゐますが、現象学を論理の先駆とのみみず相互的媒介といふ先生のお考へをのべて行けば、論理的自覚そのもの、或は之と並行する現象学が成り立ち、その場合もその現象性はErfahrungの性質をもつのではないかと思はれますが、どうでせうか。経験といへば全く受動的で過古<sup>38)</sup>なるものをたゞ受とることのやうですが、実はさうではなく<sup>38)</sup>すでに外的経験に於ても受動と自発との、内と外との結合である如く、自覚としての経験は行為性と矛盾せず、むしろ過古を含む創造であるところに具体的現在の意味をもつといへるでせう。別な方面からいへば有<sup>39)</sup>限的であると共に無限性をもち、相対的であると共に絶対知としての性質をもち得るのみならず、その経験性(これは体験的現在に於ける時間性の構造を、高められたる次元に於てもつが故に)の故に未完結性をもち、更に新たな展開に導くことが出来るでせう。さういふ見方に於てはじめて先生が「通論」でいはれたやうに「絶対自覚が常に完成にして未完であり、完全にして而も発展を容れる」(232)ことがあり得るのではないかと思はれます。同じ場所で先生は「無限の實現は有限の発展と共により具体的となる」といはれてゐますが「有限の発展」<sup>39)</sup>とはいかなることであるか。発展といふことと、

33) 田辺元「哲学通論」(岩波講座『哲学』1933年、『田邊元全集』第3巻所収)。

34) この「内容の発展といふのは具体的に」に田辺の手によると推測される傍線が引かれ、上部欄外に○印が付されている。

35) この前の文の「弁証法的発展が歴史と結びつく所以」からこの「と考へるべきでせう」までの上部欄外に田辺の手によると推測される横線が引かれている。

36) この「哲学的自覚の歴史」に田辺の手によると推測される傍線が引かれている。

37) この「いまの考としましては」から次の文の「どうでせうか」までの上部欄外に田辺の手によると推測される横線が引かれ、○印が付されている。

38) この文の上部欄外に田辺の手によると推測される○印が付されている。

39) この「有限の発展」から次の文の「一通りそれが理解出来るやうに思ひます」までの上部欄外に田辺の手によると推測される横線が引かれている。

通論でとられたやうな（それは西田先生のお考に近いのでせうが）各現在が永遠の自己限定であるといふ思想とがいかに調和されるか、私には疑問であったのですが、上のやうに考へて一通りそれが理解出来るやうに思ひます。それと共に永遠の現在の自己限定といふやうなことが必ずしもはっきりしたものでないのではないかと考へられます。他を自己に媒介すると共に自己を他に（こゝで他とは先のものとの意をも含む。それと「空間的」自他との関係も考へるべきですが）媒介することは 経験といふもの、構造から直ちに出てくることで、又さういふものは経験として成り立つ外ないやうに思はれます。之を絶対経験といつてもよいでせう。これは経験を絶対化するよりも、絶対を経験化する意味です。経験の根本性格としてどこかある点に kuluminieren するといふことはなく、ヘーゲルの摂理的予定なき歴史が成り立ち得るやうに思はれます。これは一方からいへば 経験なる説のうちに弁証法的なるものをおしかくしたものとも考へられるでせうが、そうでなく哲学的認識と経験的認識との区別に於ける一貫性を示すためです<sup>40)</sup>。

弁証法をよく理解せず、又先生の媒介といはれるもの、絶対否定性といはれるものを十分に解つてゐないために、見当ちがひのことを云つてゐるかも知れませんが、さういふ私の粗雑な考を先生に批判して頂きたくて書いた次第です。とに角私は論理と現象学との相互媒介といふお考へを具体的に展開してお説きになる日をまつものです<sup>41)</sup>。今度の御論文に実証的なものへの強い顧慮がはらはれてゐることは 何よりも私には心強く思はれます。とかく日本の哲学は主観的に傾きやすいやうですから、リアルなるものをその全的な量に於てとりいれ、マックス・ウェーバーの所謂 unbequeme Wahrheit の前に哲学が自己を決定的に維持するのでなければならぬと存じます<sup>42)</sup>。

今年も今日一日となりました。庭に雪がつもって居ります。来るべき年に先生の御健康を祈ります

十二月三十一日 三宅剛一

田辺先生

机下

[8] 昭和28年(1953)12月21日付[封書・縦書便箋4枚]

群馬縣吾妻郡北軽井澤大学村 田辺元様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

拝啓 その後はまことに申訳なき御無沙汰を致して居ります 先生の御静動については下村君<sup>43)</sup>などから時々承はり 北軽井沢<sup>44)</sup>での清澄な御日常を御恩びして居ります

先生も多分御承知かと存じますが 山内氏御退職<sup>45)</sup>の後に京都の哲学に私に出来ないかといふ話が本

40) 「これは一方から言へば」からこの「一貫性を示すためです」の上部欄外に田辺の手によると推測される疑問符が付せられている。

41) 「とに角私は」からこの「お説きになる日をまつものです」までの上部欄外に田辺の手によると推測される横線が引かれている。

42) この文の上部欄外に田辺の手によると推測される○印が付せられている。

43) 下村寅太郎(1902～1995)。この書簡の当時は東京教育大学文学部教授。

44) 田辺は昭和20年(1945)3月に京都帝国大学教授を退官し、同年7月に居を北軽井沢に移していた。

45) 山内得立(1890～1982)は、昭和28年(1953)に京都大学文学部哲学科哲学哲学史第一講座(いわゆる「純哲」)教授を63歳で定年退官した。この講座は西田幾多郎→田辺元→高山岩男→山内得立へと引き継がれてきた。

年八月頃よりあり 色々熟考の結果御引受けすることに致しました<sup>46)</sup> 東北大学の方でも先日に至って承認してくれました

輝しい傳統のある京都の哲学を担当することは 私のやうな者の力に餘ることは痛切に感じて居るのでありますが 戦後の京大文学部内の事情等も考へ 停年間近い私としては次の時代に真に良きスタッフを得ることが出来るやうに努力し、さういふ空気をつくる事が出来るならば 私のやうな者も何かの役に立つことが出来るのではないかと考へた次第でございます 先輩としての先生から御指導と御指示を賜りたく存じます

先日十日ばかり集中講義に京都に行って参りました<sup>47)</sup> 分校<sup>48)</sup>の哲学の教官や特研究生などとも会って話しました さういふ人々の会合やデスクッションの機会をもっとつくる様にしたらと思ひました 私は四月から轉任といふことになる筈です

御地ではもう雪が来てゐるのではないかと思ひます どうか御身体御大切に

十二月二十一日

三宅剛一

田邊元先生

[9] 昭和 29 年 (1954) 12 月 8 日付 [封書・縦書便箋 4 枚]

群馬縣吾妻郡北輕井澤大学村 田辺元様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拝啓 日々寒冷を加へる頃となりましたが先生には御変りもございませんか

ご高著「数理の歴史主義展開」<sup>49)</sup> 筑摩書房から送って参りましたが 先生の御指図かとも存じ厚く御禮申し上げます

先生の数理哲学の御著述が出来てゐるといふことは友人からきいて居りましたが 御大著を前にしまづ後記から拝読致しました 三十年來の宿願の立派な御達成を心から御慶び申し上げます 自分の日ごろの怠惰を厳しく誡められるやうな心地が致します

思へばかつては先生の「数理哲学研究」<sup>50)</sup>を自分の研究の台本にする様な気持ちで勉強したのでございましたが 今度の御高著からもそれに劣らぬ教示を得たいと思つて居ります 連続についても歴

46) 三宅は山内得立の後任としてこの書簡の翌年、昭和 29 年 (1954) 4 月に京都大学文学部哲学科哲学史第一講座教授に就任する (昭和 33 年に 63 歳で定年を迎えるまでの 4 年間在職)。当時の京大哲学科の状況と三宅の選考経緯については竹田篤司『物語「京都学派」』(中公叢書、2001 年) 217 頁以下に詳しい。なお三宅は昭和 21 年 (1946) に東北大学理学部から法文学部哲学科哲学第一講座教授に配置換えとなった直後、山内得立から京都大学文学部哲学科哲学史第四講座 (西洋哲学史) 教授への就任を請われていた。しかしこの時の三宅は東北大学法文学部へ異動した直後でもあり、その誘いを固辞していた (参考: 酒井潔「西田幾多郎と三宅剛一——伝記的研究の試み——」学習院大学史料館紀要、第 12 号、2003 年、61～62 頁)。

47) この年の 12 月上旬、三宅は非常勤講師として京大文学部で集中講義を行った。この時期には山内得立の後任人事が京大の学園新聞で取り沙汰されるなど、その動静に注目が集まっていた (竹田篤司『物語「京都学派」』中公叢書、2001 年、217 頁)。すでに教授就任が内定していた三宅は、「そんなところへ臨時講師で行くのも何だかくすぐったい感じだ」と書き記している (酒井潔・加瀬宣子「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡 (下)」、学習院大学人文科学研究所『人文』7、2008 年、211 頁)。

48) 戦後、昭和 22 年 (1947) 10 月に京都帝国大学は京都大学と改称された。昭和 24 年 (1949) 5 月に新制京都大学が設置され、第三高等学校を統合し、8 月に分校が設置された。分校はこの書簡の書かれた翌年の昭和 29 年 (1954) 3 月、教養部と改称された。

49) 田辺元『数理の歴史主義展開』筑摩書房、昭和 29 年 (1954) (『田邊元全集』第 12 卷)。

50) 田辺元『数理哲学研究』岩波書店、大正 14 年 (1925) (『田邊元全集』第 2 卷)。田辺は同論文によって、すでに大正 7 年 (1918)、東京大学より文学博士の学位を得ている。

史主義についても私なりに幾らか考へて参ったのですが 御著書に述べられたやうな関係には全く思ひ及びませんでした まだ一通り拜見しただけで理解が甚だ不十分で 今後もっとよく精読して考へてみるつもりです 丁度今年の特殊講義に「歴史存在論」をやり 一月になって最後の章で歴史主義の問題を考へてみようと思つて居りますので特にその感を深くする次第であります

位相学については私はごく浅薄な知識しかもつてゐないのですが 空間のモノドロジ-的な構造といふやうな考から興味をもつて居つた次第でした それも出来るだけ理解を進める様試みたいと思ひます ハイデッガーとの対決についてもいつか御書き下さる様にお願ひ致します 最近のハイデッガーのものは言つてゐるところは一應解りますけれど その眞理性についてはまだ納得しかねる気が致します

御地ではもう雪が来て居るのではないかと存じます どうか御身体御大切にょき御年越しをなさいます様祈り上げます

十二月八日

三宅剛一

田辺元先生

御侍史

[10] 昭和30年(1955)6月12日付[封書・縦書便箋3枚]

群馬縣吾妻郡北軽井澤大学村 田辺元様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拜啓 御無沙汰を致して居りますが 先生にはずっと御変わりなく居らせられることと存じます 御高著<sup>51)</sup>を送つていただき有難うございました 先日来用事や学会で東京、岡山などに参つたりして居りまして 御礼がおくれ失礼致しました

今度の御高著は「数理の歴史主義展開」の系として御書きになつたとありますが 私には必要な予備知識が足らず十分に理解できないところがございますが 先生の御主張の趣旨はほゞ解る気が致します それについては私も今度勉強してよく考へてみたいと思つて居りますが 先生の御提説は哲学徒だけでなく数学、物理方面の学者にも眞剣な反省を促がすものと存じます

先の力学についての御論文<sup>52)</sup>以来 先生の初期の御思索の対象が深められた形で再び取り上げられましたことはまことに意味深い Wiederholung であると思はれます

それにつけても先生の哲学の根本思想を歴史の論理を含めてもう一度まとめて書いていただきたいといふ念願を禁じ得ません

51) 田辺元『理論物理学新方法論提説』筑摩書房、昭和30年5月(『田邊元全集』第12巻)。

52) この時期、田辺は力学に関する論文として、「局所的微視的一現代思考の特徴」昭和23年(1948)、「古典力学の弁証法」昭和24年(1949)、「『力学の哲学』について」昭和24年(1949)を刊行している(これらは合わせて「力学哲学試論」として『田邊元全集』第12巻に収められている)。

先日東京の科学基礎論学会<sup>53)</sup>で先生の御批評に対する末綱氏の答弁<sup>54)</sup>に当る話をき、ましたが 数学の範囲のことは一応解りましたが それがなぜ行為的直観に基づくのかという点はやはりはっきり致しませんでした それにしてもかういふ論議が正面からとりあげてなされることは非常に有益だと思はれます

この頃からの北軽井沢はまことに申し分のない好気候と存じます 先生の御健康を切に祈り上げます

六月十二日

三宅剛一

田辺元先生

御侍史

[11] 昭和30年(1955)10月30日付[封書・縦書便箋3枚]

群馬縣吾妻郡北軽井沢大学村 田辺元様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拝啓 その後御無沙汰致して居りますが 高田君<sup>55)</sup>などより先生の御元氣のことを承はり喜んで居ります

「哲学研究」に出ました御論文の新刊<sup>56)</sup>となりましたのを恵贈いただきまして有難うございました 数物の内容的理解が乏しいために自分ながら歯がゆい気が致しますが先生の御論旨は解るやうに思ひます いま生物的自然といふことを考へて居りますが それにはどうしても物理的自然との関係従って後者の本質的理解がなければならないので その方面ももっと勉強したいと思つて居ります 「哲学研究」の英文概要のことで武内君<sup>57)</sup>上田君<sup>58)</sup>などが実に一生懸命にやつてゐたのをうつくしいことと感じました

九月に仙台に講義に参り<sup>59)</sup>クナウス君<sup>60)</sup>と会つて話しましたが 自著に対して先生から著者自身を

53) 科学基礎論学会は昭和28年(1953)、三宅剛一、下村寅太郎、湯川秀樹、末綱恕一、高木貞一らが発起人となって設立された。邦文学会誌『科学基礎論研究』(1954～)と欧文学会誌 *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science* (1956～) が刊行されている。この学会誌に田辺は「オスカー・ベッカー教授の『数学基礎発展史』」(vol.1, No.3, 1955年)を、三宅は *History and Transcendence* (vol.2, No.2, 1962年) を掲載している。

54) 末綱恕一(1898-1970): 数学者。大正11年(1922)東京帝国大学理学部数学科を卒業。九州帝国大学助教授、東京帝国大学理学部教授を務める。解析的整数論を研究する他、確率論においても先駆的業績を遺した。日本数学会理事長、科学基礎論学会理事長などを歴任した。三宅とは科学基礎論学会や共同研究を通じて親しく交流した。下村寅太郎や晩年の西田とも交友があった。「先生の御批評」とあるのは、田辺が自著『数理の歴史主義展開』(昭和29年)の中で数学の基礎に関する末綱の見解に対して行つた批評を指す。田辺の批評に対する「末綱氏の答弁」は、『科学基礎論研究』(vol.1, No.4, 182-184頁, 1955年)に寄せた応答論文「田邊博士の「数理の歴史主義展開」に就いて」で開陳されている。

55) 高田三郎(1902-94): 昭和2年(1927)京都帝国大学哲学科卒。オックスフォード大で研鑽を積み、広島大学助教授を経て、1947年より京都大学文学部哲学科中世哲学史講座助教授、1950年教授、1966年定年退官。トマス・アキナスなどの中世哲学を専攻。

56) 田辺元『相対性理論の弁証法』筑摩書房、昭和30年(1955)10月(『田邊元全集』第12巻)。

57) 武内義範(1913-2002)のことか。昭和11年(1936)京都帝国大学哲学科卒。1948年京都大学文学部宗教学科助教授、1959年教授、1976年定年退官。原始仏教、浄土教などを研究。父は中国哲学研究者で東北帝国大学名誉教授の武内義雄(1886-1966)。

58) 上田泰治(1918-92)のことか。昭和18年(1943)京都帝国大学哲学科卒。論理学、科学哲学専攻。後に京大教養部教授となる。

59) 三宅は京大に移った後も、少なくとも昭和29年と30年に東北大学文学部で集中講義を行っている。29年は哲学普通講義、哲学概論を講義した。

60) Gerhard Knauss (1930-): ハイデルベルクでヤスパースに師事し、戦後来日。昭和28年(1953)から昭和31年(1956)まで外人講師として東北大学文学部のドイツ文学講座の教官を勤めた。

も啓発するやうな懇切な御批評がいただけたことを大へん喜んで居りました こちらでもクナウス君を十一月末から集中講義に頼むことにして居ます

哲学の学生も前よりは少し落ち着いて勉強して居るやうですが これといふ程の者がなく、西谷君<sup>61)</sup>の長男が目立って優秀で 健康さへよければ有望だと思はれます

御地はもう初冬の季節かと存じますがこの冬も御健康で御過しになります様祈り上げます

十月三十日

三宅剛一

田辺元先生

[12] 昭和 31 年 (1956) 1 月 28 日付 [封書・縦書便箋 3 枚]

群馬縣吾妻郡北軽井澤大学村 田辺元様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拜啓 御無沙汰致して居りますが御変わりもございませんか

別紙<sup>62)</sup>の通り文学部五十年史<sup>63)</sup>に是非先生の回想記をいただき度く存じます 簡単なものでも結構でございますから どうか御執筆下さいます様御願ひ申上げます

新制の大学は学生の落ついた勉強に都合が悪いやうで 哲学の修士、博士コースにも数名づゝ居りますが これといふ目ぼしい者も見当りません 私もあと二年で停年となりますので次代の哲学科を何とかよいものにしたいと願ひして居ります とりあへず助教授選考委員会をつくってもらひ助教授の人選を考へたいと思つて居ります 昨秋はクナウス氏<sup>64)</sup>に集中講義をしてもらひましたが 出来たら外人教師として迎へたいと高田君などと相談致して居ります

御地は雪の中かと存じますが御自愛の程祈り上げます

一月二十八日

三宅剛一

田辺元先生

御侍史

[13] 昭和 31 年 (1956) 3 月 21 日付 [封書・縦書便箋 2 枚]

群馬縣吾妻郡北軽井澤大学村 田辺元様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拜復 御願ひ致しました回想記<sup>65)</sup>御送り下さいましてまことに有難く存じます 厚く御禮申上げます 拜讀して感慨に堪へませんと共に 後輩と致しまして先生の無言の御訓戒に接する思ひがいたし

61) 西谷啓治 (1900-90) : 第一高等学校を経て大正 13 年 (1924) 京都帝国大学哲学科卒。西田幾多郎に師事。昭和 10 年 (1935) 京大助教授 (宗教学) となり、その 2 年後、戦前最後の文部省派遣留学生としてドイツに赴く。昭和 18 年 (1943) 京都帝国大学教授。戦後公職追放となるが、昭和 27 年 (1952) 京大教授に復帰し、昭和 38 年 (1963) 定年退官。長男の西谷祐作 (1926-94) は後に京大助教授 (倫理学) となった。

62) 別紙として、京大文学部長高田三郎、文学部五十年史編纂委員長白井二尚の連名で、田辺元宛の執筆依頼書 (印刷) が同封されている。文学部創立五十年史記念論文集中の「回想録の部」への執筆依頼である。依頼字数は 400 字詰め原稿用紙 4 ~ 5 枚とある。

63) 『京大文学部五十年史』昭和 31 年 (1956)。

64) クナウスについては前出注 60) を参照。クナウスは、三宅が京大在職中であった昭和 30 年と 31 年に京都大学文学部で集中講義と講演を行った。昭和 30 年度の講義題目は「現代ドイツ哲学の主要な問題と方向」だった。

65) 田辺元「京大の憶出」(上掲『京大文学部五十年史』昭和 31 年 (1956) 年への寄稿文、『田邊元全集』第 14 巻所収)。

ます

御地も次第に寒気が和いで参ったことと存じます 呉々も御身体御大切になさいます様祈り上げます

匆々

三月二十一日

三宅剛一

田辺元先生

[14] 昭和33年(1958)4月2日付[封書・縦書便箋2枚]

群馬縣吾妻郡北軽井澤大学村 田辺元様  
京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拝啓 永らく御無沙汰致しました 御変りないことと存じます 私も去る一月にて停年退職致しました 四年ばかりの間何の為す所もなく慚愧の至りであります 後任は野田君<sup>66)</sup>に決定したとのことでございます 昨年一月頃から下村寅太郎君を通じ<sup>67)</sup>学習院大学に来ないかといふ話があり結局それを受諾いたしました<sup>68)</sup> 来る七日頃学習院内の舎宅に移轉致します あちこちと移り歩くこととなり落つかないことですが 東京に参りましたら少しまとまった著作を出し度く思っております

本日京都の菓子少々御送りいたしました 御笑納下さいます様願ひます  
北軽井沢も春の兆しがみえることと存じます  
御健勝を祈り上げます

四月一日

三宅剛一

田辺元先生

東京の住所

豊島区目白町一丁目一〇五七、学習院舎宅

[15] 昭和34年(1959)7月8日付[封書・縦書便箋5枚]

群馬縣吾妻郡北軽井澤大学村 田辺元様  
東京都豊島区目白町一 学習院舎宅 三宅剛一

先日は御高書<sup>69)</sup>いただき有難く拝誦致しました 小論<sup>70)</sup>に対し御懇篤な教示を賜はり感謝に堪へません 歴史を社会的的作用性をもつ行為の領域と解することがヘーゲルの客観的精神に当たるとの御指摘は一応尤と存じますが ヘーゲルでは歴史はテロスをもつ発展と考へられて居り 私はそれには同意しかねる——或はそれはむしろ信仰であって、ヘーゲルのやうにキリスト教的信と哲学との一致を確信しない限り断言できないことのやうに思ひます。超越と結びつく主観的精神の自覚が歴史的現実と

66) 野田又夫(1910-2004):1933年京都帝国大学卒業。旧制大阪高等学校教授を経て1947年京都大学文学部哲学科近世哲学史講座助教授。1958年三宅の後任として京都大学文学部哲学科哲学史第一講座教授に就任した。

67) 当時、東京教育大学教授だった下村は、新制学習院大学の創設(1949年)以来、同大学の兼任教授を務めていた。

68) 三宅は昭和33年(1958)3月に京都大学を定年退官し、4月、学習院大学文学部哲学科教授に就任した。昭和40年(1965)同大学を定年退職。

69) 田辺元「メントモリ」(『信濃教育』85号、昭和33年5月)か。

70) 三宅剛一「歴史の領域と構造」(東京大学哲学会編『哲学雑誌』第741号、昭和34年)か。同論文は酒井潔編『三宅剛一「人間存在論の哲学」』(京都哲学撰書第23巻)燈影舎、2002年に再録。

相互浸透する点について十分に考へてゐないではないかとの御批評は、あの小論に関する限り御説の通りだと存じます。たゞ私は歴史の現実には多数者としての民衆の動きが重要な意味或は力をもつので、主観の自覚から発する作用性が、大衆の欲求や動向にどのやうに働きかけた屈折を受けるかを歴史の経験によって見る必要があると思ふ次第です。それで制度化といふことを重くみたいと考へたのです。特に宗教のやうに民衆に浸透することに特色をもつ精神運動では庶民の方からの反作用を認めねばならないと思ひます。くり返される Reformation にも拘らず世俗の制度化が避けられないのは、必ずしも宗教者の「無力と墮落」にのみよると言へるかといふことを疑問と考へております。

精神の三一位相の辨証法が現象学的解釈のやり方よりも深くまた具体的であるとの御批判は私の反省のためによい指針となることと存じます。ただ私は辨証法といつてもヘーゲルにはヘーゲルの、マルクスにはマルクスの、また先生は先生御自身の内容ある辨証法があるやうに思ひますので、それ等から何を学べるかは今後またへず反省研究したいと思つて居りますが、歴史の現実に関する限りまだ私は十分納得できないで居る次第でございます。理論を実践と一致させるといふことが大切であるのは解りますが「あるべき」ことをあることと混同してブルクハルトが Wünschbarkeiten による歴史理解といつているものにならないか、行為の心情と社会的作用性との同一視にならないかといふ平凡な疑念を抑へることができません。私は近現〔代〕哲学は結局テオリアであり、そのことによつてのみ特有の超越性をもち得るのではないかと考へるやうになりました。それは哲学の人生への責任解除ではなく、むしろ哲学の本道としての責任を引き受ける——往く人なき秋の寂莫たる道を往くことなのではないかとも考へます。

北軽井沢での先生の御近況については下村君などからいろいろ伺つて居ります。そのうち最近の御述作を拜見致したいと切望して居ります。

東京は騒音と濁った空気で不健康な場所ですが中々それを逃れ出ることも出来ずにぐずぐずと暮して居ります。

御地は快い季節と存じます。御自愛祈り上げます。

七月八日

三宅剛一

田辺元先生

ENGLISH SUMMARY  
The Collected Letters from Gouichi Miyake to Hajime Tanabe  
Akihiro NAKAGAWA

A series of collected letters from Gouichi Miyake to Hajime Tanabe were preserved by Torataro Shimomura, who was a pupil of Kitaro Nishida and Hajime Tanabe at Kyoto University. Following the death of Shimomura, his pupils Professor Atsushi Takeda and Professor Hajime Shimamoto began to classify all of the letters, including the 15 letters presented here. I have reprinted and revised these letters from Miyake to Tanabe, which were written between 1924 and 1954 (three years prior to Tanabe's death).

Tanabe critically succeeded the philosophical tradition started by Nishida. For Miyake, who was a pupil of Nishida in Kyoto, Tanabe was a precious and esteemed adviser. When Miyake was an Assistant Professor of Tohoku University in Sendai, he felt particularly lonely because he had no colleagues with whom he could have discussions. In such a difficult situation, exchanging letters with Tanabe provided him an important means of communication. The collected letters are valuable materials, because they illustrate how strongly Miyake attempted to promote his study, the respect Miyake and Tanabe displayed for each other, and the determination with which they attempted to construct their philosophies.

*Key Words* : Goichi Miyake, Hajime Tanabe, philosophical attitude, self-thinking, co-thinking